

\*

如世<sup>じよ</sup>ということについて、考えなおしてみる。

数学者の伝記などによく、とびぬけて世<sup>よ</sup>離<sup>り</sup>れ<sup>た</sup> (absent-minded) 人々が登場する。彼らの精神はあてどなく彷徨<sup>ひろ</sup>いだし、抑<sup>お</sup>るべき日常をばなからもっていかないかの如くだ。懐中時計を卵<sup>たまご</sup>のかゆりに茹<sup>ゆ</sup>でた話。我が家に帰る道順<sup>みち</sup>を忘れ、ちょうど通りかかった若い女性に頼<sup>たの</sup>んで連れて行ってもらったところ、実は自分の娘<sup>むすめ</sup>だったという話。……。これらは、「俗人<sup>ぞくじん</sup>」の羨望<sup>せんぼう</sup>と揶揄<sup>げご</sup>をこめて語りつがれているため、事実とはほど遠いかもしれないが、人間に起こりうる極端な場合を示すことで、一面の真実を断<sup>つ</sup>っている。

わたしはといえば、餘<sup>あま</sup>にかいたように世<sup>よ</sup>離<sup>り</sup>れるという幸運<sup>しんうん</sup>からは、はるかに遠い。平素、決して道順<sup>みち</sup>を間違<sup>まちが</sup>えないばかりか、己<sup>おの</sup>れの日常生活を成立<sup>せいりつ</sup>させる一連<sup>いれん</sup>の秩序<sup>ていじ</sup>に万遍<sup>ばんべん</sup>なく気を配<sup>くわ</sup>り、周囲<sup>しゅうい</sup>の人間各殊<sup>おのづか</sup>の思案<sup>しあん</sup>の所在<sup>しざん</sup>や、この土地<sup>ちき</sup>特有<sup>とくゆう</sup>の因果<sup>いんぐわ</sup>律<sup>りつ</sup>についても、ひと並<sup>なら</sup>み程度の見通<sup>けんつう</sup>しはもってしているつもりである。ただ、どうやらわたしに多少とも毛色<sup>けしき</sup>のかわったところがあるとするなら、それは、わたしがこうした己<sup>おの</sup>れの日常<sup>にちじょう</sup>にどうももういっそう本気<sup>ほんき</sup>で関心<sup>くわんしん</sup>がもてないでいる点<sup>てん</sup>だろう。

いったい、人の思考<sup>しこう</sup>の内容<sup>ないよう</sup>を占め<sup>う</sup>るものは、なんだろう？

ここでの文脈<sup>ぶんま</sup>から推察<sup>すいさつ</sup>に言<sup>い</sup>えば、それは、己<sup>おの</sup>れの日常生活<sup>にちじょうじふく</sup>への関心<sup>くわんしん</sup>が、さもなければ、精神<sup>しんせい</sup>の抽象<sup>ちゆうしやう</sup>的な営<sup>えい</sup>みかの、いずれかではないだろう。ふつうにいう幸福<sup>しあわせ</sup>が実現<sup>じつげん</sup>されるのは、日常生活<sup>にちじょうじふく</sup>においてであるが、この日常生活<sup>にちじょうじふく</sup>は、各自<sup>おのづか</sup>が己<sup>おの</sup>れを配慮<sup>くわいりょ</sup>の焦点<sup>てんてん</sup>とするような中心<sup>ちゅうしん</sup>化<sup>け</sup>作用<sup>さよう</sup>を通じて、握<sup>にぎ</sup>みだし、秩序<sup>ていじ</sup>づけろしかないものである。だから、それはどうしても利害<sup>りがい</sup>として現象<sup>げんじやう</sup>することになる。他方<sup>たう</sup>、精神<sup>しんせい</sup>の抽象<sup>ちゆうしやう</sup>的な営<sup>えい</sup>みは、人倫<sup>じんりん</sup>存<sup>ぞん</sup>り何<sup>なに</sup>らかの超越<sup>てうえつ</sup>的な価値<sup>かち</sup>なりといった普遍的<sup>はんぱんてき</sup>なものへの志向<sup>しやうけう</sup>にとって、不可欠<sup>ふかたけず</sup>のはずだが、それゆえに、

自己<sup>じこ</sup>を中心とする日常生活<sup>にちじょうじふく</sup>に対しては、<sup>眼</sup>中心<sup>ちゅうしん</sup>代<sup>だい</sup>的<sup>てき</sup>にはたらくだろう。わたしのみるところ、この両<sup>りやう</sup>者は、平生<sup>へいせい</sup>、まったく無<sup>む</sup>限<sup>げん</sup>期<sup>き</sup>なま<sup>ま</sup>人間<sup>にんげん</sup>の思考<sup>しこう</sup>のなかに並<sup>なら</sup>び存<sup>ぞん</sup>しているかのようだが、いったん没<sup>ぼつ</sup>が<sup>が</sup>おしつまれば、たちまち、互<sup>たがひ</sup>に相<sup>あ</sup>刺<sup>さ</sup>するふたつの磁<sup>じ</sup>力<sup>りき</sup>圏<sup>けん</sup>としての本性<sup>ほんせい</sup>をあらわし、人の思考<sup>しこう</sup>を支配<sup>しはい</sup>しよう<sup>しよう</sup>と相<sup>あ</sup>争<sup>そう</sup>いはじめ<sup>はじめ</sup>るのだ。事態<sup>じたい</sup>が充分<sup>じゅうぶん</sup>苛<sup>げ</sup>酷<sup>こく</sup>であるなら、人は、その一方<sup>いっぺん</sup>を振りすててしまわ<sup>しま</sup>ないとも限<sup>かぎ</sup>らない——いずれにせよ、両<sup>りやう</sup>者の不<sup>ふ</sup>断<sup>たんと</sup>の緊張<sup>きんじやう</sup>のなかから、すべてが出發<sup>しゅつぱつ</sup>する。

如世<sup>じよ</sup>とは、本来<sup>ほんらい</sup>、こうした普通<sup>ふつう</sup>への志向<sup>しやうけう</sup>と己<sup>おの</sup>れの日常<sup>にちじょう</sup>とに、どこでどう折<sup>せ</sup>合<sup>あ</sup>いをつけるか、という問題<sup>もんだい</sup>であるだろう。(言う迄<sup>いた</sup>もないが、これは、上述<sup>じゆしゆ</sup>の緊張<sup>きんじやう</sup>を経<sup>へ</sup>ぬま<sup>ま</sup>利害<sup>りがい</sup>にひきよせてすべてに對<sup>たい</sup>如<sup>じゆ</sup>しようとする、いわゆる世<sup>よ</sup>渡<sup>り</sup>りとは、まったく別のことである。) わたしは目下<sup>めげ</sup>、社会学<sup>しやくがく</sup>というルートに依<sup>よ</sup>って、己<sup>おの</sup>れの日常<sup>にちじょう</sup>をこえようと試<sup>し</sup>みている。それゆえ、わたしにとっての如世<sup>じよ</sup>とは、さしあたり、わたしの社会学<sup>しやくがく</sup>をかたちづくるに好<sup>この</sup>個<sup>こ</sup>な最<sup>さい</sup>小<sup>せう</sup>限<sup>げん</sup>の日常<sup>にちじょう</sup>を保持<sup>ほくし</sup>しておくにある。わたしの「記号<sup>きごう</sup>空間<sup>くわんげん</sup>論<sup>ろん</sup>」の作業<sup>さぎやう</sup>は、足<sup>あ</sup>かけ<sup>け</sup>る年<sup>ねん</sup>目<sup>め</sup>をむかえたが、当初<sup>しんじゆ</sup>の予<sup>よ</sup>想<sup>さう</sup>を上<sup>う</sup>回<sup>わ</sup>って、ますます多くの労<sup>らう</sup>力<sup>りき</sup>と時間<sup>じかん</sup>とエネ<sup>え</sup>ルギ<sup>ぎ</sup>ーの投入<sup>ていじゆ</sup>を必要<sup>ひつやう</sup>とすることが判<sup>はん</sup>明<sup>めい</sup>してきており、差<sup>さ</sup>引<sup>ひ</sup>よご入<sup>い</sup>回<sup>わ</sup>す余<sup>あま</sup>地<sup>ち</sup>は、ほとんどないからだ。

もっと身近<sup>みぢな</sup>なことに直<sup>ちか</sup>せば、わたしの如世<sup>じよ</sup>の問題<sup>もんだい</sup>とは、当面<sup>たうげん</sup>、就<sup>しゆ</sup>職<sup>じやく</sup>に要<sup>よう</sup>約<sup>やく</sup>されるのだが、こうしてみると、他人<sup>たうじん</sup>のことはいざしらずわたしには、就<sup>しゆ</sup>職<sup>じやく</sup>はどうもアラス<sup>あらす</sup>になりそうもない。無理<sup>無理</sup>をしてまでわざわざ急<sup>いそ</sup>いで職<sup>しやく</sup>をもとめる理由は、いまのところ見<sup>み</sup>当<sup>あた</sup>ら<sup>ら</sup>ないだろう。もちろん、金<sup>かね</sup>が入<sup>い</sup>らないのはそれなりに痛<sup>いた</sup>いが、それだけのことだと言<sup>い</sup>う言<sup>い</sup>方<sup>かた</sup>もできる。こういふときに、やみくもに就<sup>しゆ</sup>職<sup>じやく</sup>しよう<sup>しよう</sup>としたりすることは、明らか<sup>めいらか</sup>に、なにものかへの屈<sup>くつ</sup>服<sup>ふく</sup>をいみする——すくなくとも、わたしの場合には。

以前<sup>いぜん</sup>、この4月<sup>しがつ</sup>ごろまでに職<sup>しやく</sup>をみつけようかと思う、というようにことを書いたために、何<sup>なに</sup>人<sup>ひと</sup>かの友人<sup>ゆうじん</sup>に心配<sup>しんぱい</sup>をかけたしまって、すまないと思っている。さきのことはわからないし、多少<sup>たうしやう</sup>のおっかな

びっくりも手伝って、あ、いう書き方になってしまった(いままでの癖は、丈して変わらぬ)が、結局わたしは横着な無弁人間で、現に享受している時間的自由と研究上の別荘——言語研究会と小室セミナー——とをなかなかな手離す気になれないでいるだけなのである。そこで、当座は、これらを犠牲にしないですみそうなる公算のチャンス(きわめて稀である)があれば応募することにして待ちながら、わたしの仕事をすこしでも先にすすめる、というフリースタイルをとることに成りそうだと(さきのことは、わからないが)。別の友人からは、こうしたわたしの方針が「まったくいい加減じゃないか」とたしなめられた。たしかにその通りである。しかし、わたしは、「いい加減」でかまわない、むしろその方がいいと思ふ。

いったい日常にかかゆりたがらないわたしの性癖は、奈辺に由来するのか? いきなりか、それともいきがかりか? 察分かは質問にもよろう。日常とはどうも嘘くさく、しらけてしまっとうしよなもの。しかしあえて思想のことで語れば、それは時代のなせるわざである。日常から撥き出されるわたしの必然を感じたなら、そのままの向きでどこまでも普遍をたどったはてでしか、もとの日常と和解するすべはない、と思われた。このバクトルにさってわたしの社会学があり、それが日常となす角度——如世——は、時代に対峙するわたしの戦略の一端をになつてゐる。(資本制が利害の体系として営まれうるとしても、言語が利害から産まれる筈はない。)

——もっとも、このように我ままを通すことで、わたしの日常ならまだしも、他者の日常をその分だけ捻じまがてしまうことも、また確かである。そのように互いの日常を重ね合わせているのか、たとえば血縁ということだから。わたしが彼らの承諾を乞ひようといまいと、わたしに視ようのないところを、おそらくわたしの想う以上に、わたしはいくつかの日常を踏みつけにしている。これはわたしの歴然たる負い目である。相殺するすべはないが、ただ、わたしも日常を相應に變形させ、かろうじて平衡を保つことはできるだろう。ただし、いまはまだそのときでないようだ。

\*\*

ちょうど1年ほど前、わたしの仕事に、読者・批判者として継続的につきあってくれる方を募ったところ、見ず知らずの方を含めて、いろいろ申しこみをいただき、有難いことと感謝している。しかしまだわたしの事務力には多少のゆとりがあり、「記号空間論」の作業もいましばらく緩くはぶるので、再び同趣意の呼びかけをしよう。

すでに応募いただいた方々は、つぎの双務契約を交している。即ち、わたしを甲、相手方を乙とすると、

1. 甲は、甲の論文類を、乙に頒布する。
2. 乙は、そのための費用を、甲の請求にもとづき甲に支払う。

という内容だが、註釈を加えよう。①「甲の論文類」とは、(i)甲の仕事すべて、(ii)「記号空間論」関連のものすべて、(iii)「月報」のみ、のなかから乙がえらんだものをいう。(乙が、特定のジャンルを予め指定してもよい。)②「頒布」は、SDFコピーを当面利用し、手交するか、適当にまとめて郵送している。(『ソソオロゴス』など、版權の関係で、現物を送らねばならない場合も、ありうる。)③「そのための費用」とは、頒布の実費(コピー代+送料)を、さす。④「請求」は、毎年11月ごろ、わたしが一括して行なうつもりである。⑤「支払」は、わたしの郵便振替口座(横浜 51782, 橋本大三郎)を利用していただきたい。領収証は出さないから、入金票をもってかえてほしい。また、乙から甲あてに債権(たとえば、論文コピーを送った等)があれば、支払額から相殺してもらおう。⑥この契約は、乙の通告で、いつでも、またいかなる理由によっても、中断もしくは破棄できる。その場合、遠慮なくその旨葉書といただきたい。通告がないなら、甲は、乙が2を履行する限り、1を履行する。

この契約を語ぼうという文は、どなたも葉書で御一報ねがいたい。

HASHIZUME Daisaburo : 5-9-11 Zaimokuza Kamakura Kanagawa 248 Japan

YOKOHAMA 51782

CN 75 ¥10.- / 4 pages

《論文類頒布リスト》

〒 〇〇

※ 郵便振替の場合、該当金額と差引の旨、払込票の通信欄に記入が必要です。

様

これまで、以下のようにおとどけしたと思っておりますので、

1. 請求金額を、指定の振替口座へお払いこみ下さい。
2. お手許に届いておりますかどうか、お確かめ下さい。
3. 実費を、1に準じた仕方でお払いこみ下さいは、嬉しく思います。

橋爪 大 三 郎

記

CN	Title	Tax	Note	Have?	Paid?
37	性別論(予稿)	¥50			
38	家族の生成理論(草稿)	145			
39	「家族の生成理論」は可能か	80			
40	記号空間論(素稿)	70			
41	<適性対称性>をめぐって	160			
42	<言語>派社会学の方法的基礎	105			
43	性別論 関連文献	45			
44	加工品の眩暈	125			
45	月報1	15			
46	月報2	15			
47	構造=模範理論の射程と限界	210			
48	月報3	15			
49	月報4	25			
50	月報5	20			
51	月報6	65			
52	性別のありか	40			
	『女性の社会問題』 vol. 2	300			
53	研究者運動の課題と戦略	120			
54	'78 小室むすびリスト	15			
55	廣松渉 著作目録	12.5			
56	論評:高木英全論文(1977)	55			

CN	Title	Tax	Note	Have?	Paid?
57	"<言語>研究集団"への提言	¥17.5			
58	2階差分方程式の解法	20			
59	乗数理論と加速度原理	35			
60	比較生産差説	50			
61	位相空間論	70			
62	A氏宛書簡				
63	多変量正規分布	95			
64	三氏鼎談				
65	"記号空間論"の基本理座	720			
66	月報7	25			
67	解雇の人間化	140			
68	月報8	35			
69	容観論	125			
70	<言語>派法理論・要前編	230			
71	人称構造論	35			
72	月報9	30			
73	<言語>派法理論・略説	20			
74	月報10	30			
75	月報11	10			
94	線型空間論	100			
95	広松理論の種と仕掛	15			
96	マイクロ経済学の理論	50			
—		—			
—		—			
—		—			

郵務費用

20

郵送料

(内訳)

粗送料

(内訳)

